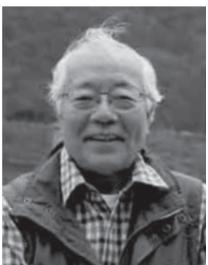


戦えないしらふ やるせない

財団法人リバーフロント
整備センター理事長
竹村公太郎
Kotaro Takemura

七〇年前の戦い

昨年二〇一一年の十月、神奈川県小田原市で開催された「酒匂川九十間土手修堤七〇周年を考える住民の集い」に参加した。二宮尊徳記念館は大勢の老若男女でいっぱいになっていた。

戦前の昭和十三年、梅雨の長雨で酒匂川の本堤の一五〇坪が七月一日決壊した。本堤防を破った濁流は「控え堤防」を襲った。控え堤防の決壊を防ぐため、村民総動員で水防に当たった。七月三日には軍の赤羽工兵隊や横浜消防隊も到着した。七月九日まで一〇日間延べ一万人の戦いで、人々は洪水に打ち勝ち、集落と田畑を守り抜いた。

その洪水の後、神奈川県は堤防復旧工事を実施し、昭和十六年に現在の九十間土手が完成し

た。その昭和十六年から七〇年経った平成二十三年に記念行事として行われた集会であった。

この集まりの圧巻が七〇年前の水防活動をした九〇歳の太田安茂さんと、様子を目撃していた八六歳の府川芳枝さんの思い出話であった。

二人の戦いの思い出

七月一日の未明、高校生の太田安茂さんは父親に叩き起こされた。水防に行くという。母親が作った朝食をかき込み、雨の中を控え堤防に向かった。屈強な大人たちが働く中、太田さんは「石送り」に従事した。

自分も前後の人々も手を血で染めて石を運び続けた。三日には赤羽工兵隊が駆けつけてくれた。疲れていたが勇気づけられ一層元気が出てきた。自分たちの「ほいきた、よいしょ」とい

アイデンティティーは露わに姿を見せていった。

災害列島とアイデンティティー

日本は地球の「災害のショーケース」と呼ばれている。日本列島には全ての災害が揃っている。地震、津波、火山噴火、台風、集中豪雨、洪水、異常高潮、豪雪、雪崩、雷、竜巻、地すべり、山崩れ、冷害、旱魃と日本に存在しない災害はない。

約三、〇〇〇年前、日本人は稲作を開始した。稲作に適した沖積平野は水はけの悪い湿地帯で、ここにへばりついて稲作共同体を形成していった。どんな大災害が襲っても、地域共同体はその土地にとどまり、災害に立ち向かった。

世界史を作ったユーラシア大陸の人々は厳しい干ばつや冷害に襲われた時、実り豊かな土地へ大移動した。しかし、日本人は他の土地に移動しなかった。その土地で災害と敵と闘うことが、共同体のアイデンティティーとなった。

どのような災害でもその土地から逃げず、災害と闘う日本人という歴史を三・一一災害が変えることとなった。

福島第一原発の事故である。

やるせない

二〇一一年四月二十二日、福島第一原発の半

径二〇キロ圏が「警戒区域」になった。八万人ちかいひとびとが強制的に故郷を離れなければならなかった。

同じ三・一一の地震津波の被災者たちは、家族も学校も思い出のすべてを失った。しかし、彼らは故郷の地に立っている。何年かの後、必ずこの故郷の地は甦ることを知っている。

先祖たちは、どんな災害でもそれと戦い、必ずその地で故郷を再建してきた。いまは廃墟だが、自分たちの土地がある。土地さえあれば、故郷は再建できる。故郷の土地が人々を勇気づけた。

ところが、福島第一原発で避難した人々は故郷の土地に立てない。災害と闘い故郷の復活のために努力する場がない。

「やるせない」という言葉が、強く迫ってくる。「やるせない」は「遣る瀬無い」と書く。それは、舟に乗って岸に向かうが、舟を付ける瀬がなく、舟が漂っている不安定な状況からきている。岸に着く瀬を懸命に探すが見つからない。舟は川に流されて、少しずつ見知らぬ景色となっていく。一体自分たちはどうなるのか。何時まで舟で漂っていればいいのか。舟が着く瀬は本当にあるのか。

強制的に故郷を後にし、災害と闘えない人々のやるせないさは、いかばかりであろうか。

るようお祈りしている、という。二人の思い出話を聞いている中、目頭を押さえる人もいた。私は日本人のアイデンティティーの真つただ中にいることに気がついた。

日本人の敵

米国の社会学者の故サムエル・ハンチントン氏によれば、世界史の中で生き残った五つの文明がある。それは欧米、イスラム、インド、中国そして日本文明である。その中で日本文明だけは、特異な文明である。日本文明には敵対する文明はないが、連携する文明もない、日本文明は孤立した文明であるという。

世界史に登場する文明は、例外なく多民族に侵略されている。日本文明だけは侵略されていない。民族のアイデンティティーは侵略してくる敵との戦いの中で醸成されていく。そして、民族の一体感は、敵の登場によって表面に現れてくる。

では、敵に侵略されたことのなかった日本人は、アイデンティティーをどのようにして醸成していったのか。

日本は外敵には侵略されなかったが、敵はいた。それは、自然災害であった。日本人は災害と闘う中で、共同体のアイデンティティーを醸成していった。自然災害が発生すると、日本人の